

虚実間証



最近、登録販売者用学習会で「宇津救命丸」を取り上げました。適応症の一つに「小児五疳(ゴカン)」があります。漢方医学でいう**五臓**での陽気と陰液のバランスが崩れて生じる**小児の異常行動**という意味になるようですが、そこでふと数年前に漢方医学の概念で実証と虚証の説明をしていた時にある薬剤師さんから質問をされたことを思い出しました。「**虚実間証という状態にもっていけば病気は治ると考えてよいのでしょうか?**」というものです。「**虚実間証も病態の一部だから治った状態ではないです。私なりに整理してまた答えましょう**」などと答えたままで、その後彼女には何も答えていなかったと思ひ至りました。既に勤務先が変わり会うことも無くなりましたが今さらながらの話題になります。

1) 陰陽・虚実とは

様々な中国思想の中の一つになります。先ほどの五臓も**五行論**から出ていますし、その他**二元論**という考え方もあり、それが**陰陽**であり**虚実**になります。様々な解説本がありますが、ここでは寺澤捷年著「症例から学ぶ和漢診療学^{資料1}」から主に引用して説明します。

①陽証

病気になった時にしめす**体全体の修復反応**が総じて**熱性、活動性、発揚性**の病態を示します。暑がり、薄着を好み、首から上に汗をかく。顔面の紅潮や眼球の充血、高体温傾向、脈浮、胸脇苦満などの症状が例として挙げられます。**六病位**という概念では陽証はさらに3つに分類され、**太陽病、少陽病、陽明病**に分かれます。

登録販売者用テキスト^{資料2}では「**陽病**」として紹介され「**病状**」を現わすと説明があります。

②陰証

陽症と真逆の病態で**体全体の修復反応**が総じて**寒性、非活動性、沈降性**の病態を示します。寒がり、厚着を好む。温熱刺激を好む。顔面が蒼白、低体温傾向、四肢末梢が冷える、脈が深いなどの症状が例として挙げられます。**六病位**では陰証はさらに**太陰病、少陰病、厥陰(ケツイン)病**の3つに分類されます。資料2では「**陰病**」として紹介され、同じく「**病状**」を現わすとあります。

③実証

病気になった際の**体の抵抗力が強い**状態をいいます。ここで抵抗力が強いとは**気血の力が強い**ことを意味します。陰陽の概念が体全体の病態を意味するのに対して体の**局所的な気血の反応の強さ**を示しています。柴原直利ら監修「漢方医学の基礎理論と臨床DVD版^{資料3}」によると体のもつエネルギーには生体を維持する気(エネルギー)と病気のもつエネルギー(**邪気**)に対応するための気(エネルギー)があると、生体のもつこの二つの気を**正気**としています。邪気を押さえ込む**正気の威力が強い**場合を**実証**の状態であるとしています。

資料2では同じく「**実証**」として紹介され、体内臓器を動かす**エネルギーの貯蔵の多い**状態を意味し、比較的体力のある「**体質**」との説明があります。

④虚証

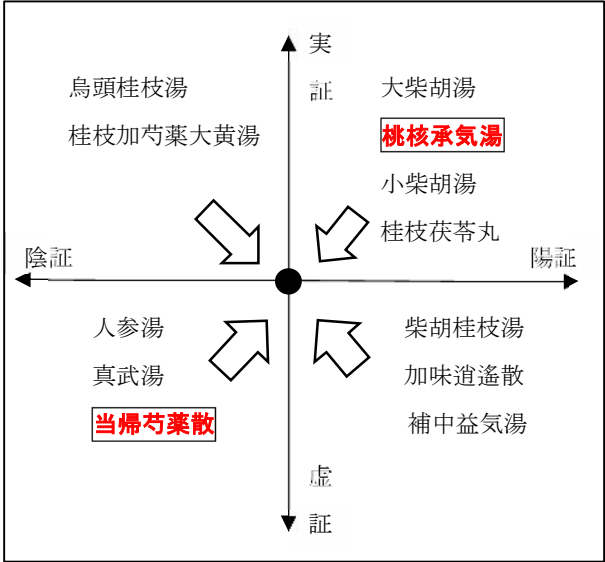
実証とは逆で病気になった際の**体の気血の力が弱く抵抗力が弱い**状態をいいます。実証と同様に局

所的な**気血の反応の弱さ**を意味するとされています。資料3によると病気に対応できる正気の勢いが、邪気の勢いに負けている状態になります。本来生命維持のため使われるべき正気も利用され虚弱な状態になりがちになります。資料2でも「**虚証**」として紹介され、体内臓器を動かす**エネルギーの備蓄が少ない**状態で、**虚弱体質**の人との説明があります。

2) 陰陽と虚実の関係と漢方薬の方向性

資料1からですが、**横軸に陰陽、縦軸に虚実**をとった二次元図(右図)にすると漢方薬はそれぞれの証に応じて区分できるとされます。各象限にある漢方薬は**原点**(その人にとって健常な状態)に体の状態を向かわせるように作用します。漢方薬は治療の方向性をもつため**方剂**と呼ばれています。

実証・陽証(第一象限)の人に**桃核承気湯**を投与すると**左斜め下方向**に進ませ**原点**に戻そうとしますが、もし**虚証・陰証**(第三象限)の本来は**当帰芍薬散**が適応する人に**桃核承気湯**を服用させるとさらに**左斜め下方向**に進ませて陰証症状が強くて体の冷えやひどい下痢になったりします(誤治)。



原点が健常な状態(病邪による歪みが無い状態)とすると、**全体の症状(陰陽の横軸)が改善**されると陽証でも陰証でもない症状の原点に落ち着くことは何となく理解できるかと思います。では**虚実の縦軸**の原点はどういう意味があるのでしょうか。**虚実**は病邪に対する体の**エネルギー(気血の力)の強弱**にあたる**体質**を示す概念ですから、虚実の縦軸を単に**体質**とだけとらえると第一象限(実陽)や第三象限(実陰)にいる**抵抗力の強い人達**を治療によって原点に近づけ**わざわざ抵抗力を下げる方向にもっていく**ことになり不合理な話になります。おそらく縦軸の虚実の意味は体質の表現ではなく**気血の力の強弱**によって起こる**個々の生体反応**を示していると考えられます。病気が治癒し陰陽の証が正常に戻った時、気血の優劣による反応も鎮静化しているはずですが、**虚実の証自体、つまり体質自体はそれほど変わらない**と考えるべきではないでしょうか。資料1でも**虚実軸を局所の反応**と説明しています。

よく漢方薬は**体質を改善**してやんわりと効いてくる薬と説明をする場合がありますが、これは**虚弱な体質**の第3象限(虚・陰)や第4象限(虚・陽)に該当する漢方薬が体質改善の役割を担っていると考えると辻褃が合う気がします。実際に虚証の漢方薬には気を高める、いわゆる**補的作用**がある薬が多い印象があります(大胆かつ簡単に言えば食物の吸収を増して体力が付くように働きかける漢方薬)。

3) 虚実間証とは

虚実間証とは実証と虚証には中間段階に相当し、これまでの説明から**邪気**のもつエネルギーと生体側の邪気に対する**正気**のエネルギーが**拮抗**している状態と言えます。病気になっている間は、時に正気 > 邪気、時に邪気 > 正気の勢力状況が繰り返すかもしれません。そのような体質が虚実間証でしょう。

先に質問してきた薬剤師さんへの回答ですが『**虚実の概念はあくまで体質であり、虚実間証が健常状態を意味する訳ではありません。虚実の基になる気血の強弱によって人は異なる反応をしますが、漢方薬で病気自体が治癒すると気血の強弱による反応も無くなり原点に戻りますが、実証、虚実間証、虚証という体質自体は基本的に変わることは無いでしょう。ただ虚証の人は体力が付いた分だけ実証とまでは行かないまでも虚実間証の気血の勢いを持てる可能性があり、それを漢方薬の体質改善作用と呼んでいるのですよ**』というのはいり過ぎでしょうか？ (終わり)